

京都橘大学  
地域連携センター

つながる Vol. 15

つながる

CONTENTS

Interface 実践の知 第14回

西脇小学校校舎を使い続けていくために

足立 裕司 神戸大学名誉教授・博士(工学)

各学科における地域連携活動取組報告

超高齢社会を見据えた産学連携事業

こだわり市場冊子を活用した高齢者ツーリズム企画

現代ビジネス学部都市環境デザイン学科谷口知司ゼミ

×洛和会ヘルスケアシステム介護事業部

谷口 知司 本学現代ビジネス学部教授

人々の生活がイメージできる学生を育てるための  
仕掛け作り：醍醐中山団地お助けたい(隊)

松本 賢哉 本学看護学部教授

支え、支えられる、メンタルヘルスに着目したサポート  
「しゅくだいかたづけ隊！」参上

大久保 千恵 本学健康科学部准教授

京都モダニズム建築を訪ねて 最終回

京都のモダニズム建築前夜

河野 良平 本学現代ビジネス学部准教授

Interview ともに 第14回

限界集落の空き家がオーベルジュに生まれ変わり、  
そこに人が集う

まちの持続可能性を、ビジネスによって高める取り組み

金野 幸雄 一般社団法人ノオト 代表理事



15

## 西脇小学校校舎を 使い続けていくために

足立 裕司 Adachi, Hiroshi

神戸大学名誉教授・博士（工学）



兵庫県生まれ、神戸大学工学研究科修士課程修了後、設計事務所勤務を経て1977年より同大学にて研究・教育活動に従事し、2014年に退職。専門は近代建築史・建築論、共著書に『武田五一・人と作品』（明治村）、『フランク・ロイド・ライトと武田五一』（福山美術館）、『再生名建築』（鹿島出版会）他。この他、兵庫県指定重要文化財九鬼家住宅、同志社女子大学ジェームズ館、神戸大学六甲台講堂・本館・図書館などの修復工事も手がける。

### 保存への道

5年以上を費やし、西脇小学校校舎の保存とこれからも長く使い続けていくための改修工事をこの夏によく終えることができた。西脇小学校は、総2階建ての堂々とした校舎が3棟平行して建つ大規模な木造校舎の小学校である（写真1）。校舎は昭和9年から11年にかけて建てられ、何度かの小改修を経ながら使い続けられてきた。この間、教師や父兄達から地震や火事に対する安全性への不安や設備上の問題や不便さが指摘されてきたが、旧西脇町時代に多額の予算を費やして建てられた自慢の校舎だけに大事に思う卒業生や市民も多く、その存続の可否については意見が分かれていた。

しかし、2012年に前市長の下で検討された校舎の耐震診断の結果を踏まえ、建て替えの方針が提起された。この建て替え計画に対して「西脇小学校の木造校舎を想う会」や日本建築学会から保存の要望書が提出され、ちょうど市長も交代したことから、2014年3月に「西脇小学校校舎基本計画検討委員会」が設置され、木造校舎の存否について原点に立ち返って検討するようという諮問がなされた。

この委員会の委員長を仰せつかったことが、私が

この西脇小学校と向き合うことになった機会である。委員会では約1年をかけて検討が続けられた。検討内容は、3棟全部を残す案から、1～2棟を保存する案、全撤去して新校舎を建て替える案まで、それぞれの案について熱心な議論がなされた。委員から多く投げかけられたのは、果たしてこの木造校舎で安全安心が確保できるのか、教育施設として本当に十分な環境を提供できるのかという疑問であった。こうした疑問に対して、下部組織として設置されていたワーキングで技術面から検討し、委員会にその都度報告された。市民へのアンケート調査も行われ、結果は、概ね保存を希望する声が大きかったが、建て替え案については予想に反して60歳以上の年代が最も強く支持するという傾向がみられた。

委員の意見分布は、当初は南の1棟だけを残し、あとの2棟を建て替えるという案に支持が集まっていたが、1棟だけ残して記念館にするにしても、教育施設との管理上の区分がしにくく、また、誰が管理するのかといったマイナス面や、何よりも1棟だけでは文化財としての評価は激減してしまうということもあり、結局僅差ではあったが3棟全部を残すという結論に至った。

ただし、3棟保存といっても、優先されるのは教

育施設としての整備であり、新築校舎と同等の使い勝手や安全安心を確保することが条件として付帯され、逆に文化財としての保護は二義的な目的であることが、回答書に記されることになった。

### 文化財<sup>注1</sup>としての価値を守る

上記のような難しい条件をクリアするには、多くの専門家を交えた組織と検討期間が必要であることから、2015年に西脇市と神戸大学との連携協定が締結され、「西脇小学校基本計画・設計チーム」が発足することとなった。木造校舎の最大の難点であった2階の騒音問題や冬期の寒さ対策の調査はもとより、学校側との意見調整、先生達とのワークショップなど、多方面にわたる調査・研究が行われ、同年10月、翌2016年5月には市民への報告会を開き、計画の概要についての説明と意見聴取を行なった。

準備がおおよそ整った翌2016年9月、実施設計組織に（株）内藤設計が決定した。内藤設計は校舎を設計した内藤克雄（1990年～1973年）が設立した設計事務所であり、今回の校舎改築工事には心強いパートナーであった。

### 着工から竣工まで

2017年6月によく工事業者に隣町丹波市の建設業者である吉住工務店に決定した。工事は、表向きは文化財保存事業ではなく、あくまで教育施設としての改修工事ではあったが、文化財としての価値を損なわないよう工事中の調査や記録、仕様や細部、納まりの検討などできる限りの努力をすることを契約の際に、西脇市との間で確認された。

工事は3棟の校舎の南から1棟ごとに工事を進め、修理が終わると教室を戻して使用し、空いた校舎をまた改修するという「居ながら工事」とすることで仮設校舎の経費を最小化した。その結果、学年途中の引っ越しや工事の騒音、工事中の仮囲いによる迂回など先生や生徒にも忍耐と協力をお願いする



写真1 堂々たる正面外観

こととなった。工事を引き受けた吉住工務店にも、学校行事に合わせた工事計画の調整や文化財としての価値を維持していくための多くの無理をお願いすることになったと思われる。

こうした歴史的建造物の工事としては工事期間も短く、工費も十分といえない状況で、工事の担当所管となった西脇市役所教育委員会、建設課は学校側や市民との調整を熱心に行っていたが、今年7月に4ヶ月の工期延長をして完了した。今年度中に外構を整備し、来年夏休み中に北側に付属する鉄筋コンクリート造校舎の改修がまだ残されており、完全な完成にむけた取り組みはまだ続く予定である。

### 工事を終えて

2年間の改修工事を無事終えることができたが、教育環境の整備と文化財としての価値を維持するという相反する要求をバランスさせることが難しい工事であったが、工事に関係する全員の協力により何とか目標を達成できたのではと思われる。

この建物は西脇市内に残る唯一の木造校舎であり、県下や全国的に見ても数少ない木造大規模校舎である。しかも、学校施設として使い続けている校舎は本当にごくわずかである。旧西脇町の中心となる小学校として町の誇りをかけて建設された校舎が、世代を超えた思い出の場所としてこれからも長く使い続けられていくことを願ってやまない。

注1 ここで使う「文化財」とは、歴史的建造物としての価値全般を指している。

超高齢社会を見据えた産学連携事業

こだわり市場冊子を活用した高齢者ツーリズム企画

現代ビジネス学部都市環境デザイン学科谷口知司ゼミ×洛和会ヘルスケアシステム介護事業部

谷口 知司 Taniguchi, Tomoji

現代ビジネス学部 都市環境デザイン学科

当事業は医療、介護機関である洛和会ヘルスケアシステムと教育機関である京都橘大学のそれぞれの資源を活用し、地域と高齢者との繋がり強化および人材育成を目指すものである。この切っ掛けとなったのは谷口ゼミの卒業生であり当時、洛和会ヘルスケアシステム介護事業部地域包括ケア推進室に所属した尾形成望氏が、彼自身も学生時代に制作に関わった「こだわり市場」を活用して、高齢者向け住宅の入居者を対象として谷口ゼミと何らかの協同ができないかという提案であった。

その後、両者の何回かの協議を経て、谷口ゼミが蓄積してきた「こだわり市場」の資源を活用し、洛和会ヘルスケアシステム介護事業部と京都橘大学現代ビジネス学部 都市環境デザイン学科 谷口ゼミ（観光学）が連携・協力し（産学連携）、今後の超高齢社会での観光業界を見据え、サービス付き高齢者向け住宅 洛和ホームライフ音羽に入居されている高齢者と学生が、一緒に京都市内のこだわりの店舗・神社などを巡るツアーを企画、実施するというに至った。

「こだわり市場」冊子を新たな展開で活用する。

「こだわり市場」の活動は世界的な観光都市である京都にも、まだあまり知られていない名店がたくさんあり、それらを“こだわり”という観点から発掘し、広く紹介するという活動である。活動の成果はホームページ（http://www.kodawari-ichiba.net）への掲載と毎年度一冊のペースで発刊してきた冊子（過去に6冊制作）として発表してきた。これらは主に京都を訪れる観光客に活用されることを目的に作られ、冊子は毎年、京都総合観光案内所「京なび」や京都市内の有名ホテルなどに配置して、外国人を含めた多くの観光客の利用に供してきた。

当企画では、この「こだわり市場」の活動において収集された“こだわり”の店とそれらを集めた冊子が、京都を訪れる観光客のみならず、京都在住の方々にとっても新鮮な情報源であり、地域の高齢者施設の入居者の皆さん達を対象としたツアーに適用可能であるということが実証されたことになり、「こだわり市場」の活動が、その対象者を含め、新たな展開を迎えたといえる。

繋ぐ、広がる、地域の輪、施設高齢者向けツーリズム。

当活動を地域貢献的なものとして捉えた場合、超高齢社会を見据え、高齢者が「住み慣れた地域での自分らしい暮らし」ができるように、「地域包括ケア」の理念に基づいた、地域活動として考えることができる。

また産学連携の教育プログラムとして捉えれば、観光ツアーの企画・体験を通じて、高齢者と若年層の学生が交流を深め、高齢者は「生きがいづくり」の実感を得、学生は今後の超高齢社会での地域と高齢者との関わりを学ぶきっかけ作りを図ることができる。つまり当企画は高齢者、地域社会、学生の三者にとってそれぞれにメリットがあるものとして設計されている。

①高齢者にとってのメリット

- ・多世代との交流による、心の癒しや活力の向上
- ・生きがいの気づき

②地域にとってのメリット

- ・次世代の人材育成
- ・地域の連携強化のモデルケース（学生、企業、高齢者（住民））

③学生にとってのメリット

- ・観光学を学ぶ学生が主たる対象であることから、今

後の観光業界を見据えた、高齢者・要介護者に特化した観光ツアーの企画・実施

- ・高齢者、要介護者とのふれ合い体験
- ・高齢化社会および高齢者と地域との関わりについて考えるきっかけ作り

綿密な事前準備を経てツアーの実施へ。

実施のための各種提案、コース設定、下見、レクリエーション企画などを繰り返し行い、第一回目のツアー（2018年3月18日：東山地区）を実施した。谷口ならびに谷口ゼミ学生11名、洛和会ヘルスケアシステム介護事業部からは介護士3名、洛和会音羽病院から看護師1名、その他協力者5名の体制のもと、施設入居者8人の参加を得た。バスは洛和会ヘルスケアシステムの病院送迎用バスの提供を受けた。その後も二回目に向けて、

谷口ゼミ洛和会ヘルスケアシステム、訪問施設、店舗などとの間で、ツアーがより快適で安全なものになるように何度も協議し、10月22日の職場体験（車いす体験、施設入居者との交流）を経て、11月10日に第二回目を実施した。一回目の反省をもとに、訪問先施設との調整、バスの座席配置などにも配慮した。中京区を中心に、「こだわり市場」に掲載された店舗での買い物、万華鏡ミュージアムで万華鏡の手作り体験、京都文化博物館内の飲食店での軽食などを含め、充実した内容で、参加者の皆さんや施設関係者の方から高い評価を頂いた。現在、引き続き第三回目の実施に向けて様々な検討を進めている。

なお、これまでのツアーの詳細については洛和会ヘルスケアシステムのホームページ（www.rakuwa.or.jp/kaigo/tourism/index.html）に紹介されている。



「こだわり市場」掲載店舗でのお買いもの様子



万華鏡手作り体験を終えて



和風スイーツのお店でのふれあい

# 人々の生活がイメージできる学生を育てるための仕掛け作り： 醍醐中山団地お助けたい(隊)

松本 賢哉 Matsumoto, Kenya

看護学部 看護学科

## 地域の住民も喜び、学生の学びも得られる 看護学実習の在り方

看護の対象となる人々の生活に視点を置くことは、看護を行う上で、非常に重要である。しかし、世代間交流が少ない近年の学生にとって、高齢者の日々の生活をイメージすることは難しく、入院者に対する支援を考える際の障害となっている。そこで、醍醐中山団地の住民の協力の元、高齢者の生活を知るための実習を計画した。醍醐中山団地は高齢化に伴い、独居高齢者率が高い。4階建ての団地にはエレベーターが設置されておらず、粗大ごみの搬出が容易ではない。また、部屋の模様替え、風呂場や台所等の水回りの掃除など、生活上の様々な“困りごと”があることは想像に難くない。

住民にとっては“困りごと”が一時的ではあるが解決し、学生にとっても家に上がらせてもらい、日常生活を見させてもらえる貴重な学習の場となる。しかし、実施前は、学内や自治会の棟長などより、協力者の家のモノを破損するリスクや、怪我をするリスク、犯罪に巻き込まれる危険性を危惧する声や、生活スキルの低い学生に対応できるのかと不安視する意見があった。

怪我や破損のリスクに関しては、この実習が正規の授業の一環であり、実習の保険で対応できることを確認した。また、犯罪に巻き込まれる可能性に対しては、訪問する家庭を自治会からの推薦協力者に限定し、単独では行動せず、複数の学生によるチーム制を導入した。さらに、トラブルの連絡を受けた教員は5分以内に対応する環境を整えた。生活スキルの低さに関しては、掃除方法や一般常識レベルのマナー講習を実施し、必要とされる作業内容を事前に把握し、予行演習を行った。

## 様々な生活の苦勞を抱えた住民の 家庭を訪問した学生の学び

棟長の声がけにより、醍醐中山団地の住民の中から、実習協力者と作業内容を募り、その作業内容に合わせ、学生配置と実習を行った。協力者は毎回25～30世帯、学生配置と実習を行った。協力者は毎回25～30世帯、1世帯に対して3～4名の学生を配置、残りの学生は後方支援や集会場の掃除などを行った。学生たちは作業を行いながら、買い物や食事などの高齢者の普段の生活等、様々な話を聞くことができた。学生にとって貴重な“学び”となったのは勿論だが、若い人と話をする機

会が少ない協力者も、楽しい時間を過ごすことが出来たと喜んでた。地域の住民も喜び、学生の学びも得られる、持続性のある看護学実習の方向性が導き出せたと考えられる。

醍醐中山団地で実施している「お助けたい」はプライマリケア実習に位置付けられている。醍醐中山団地事業は、本学と京都市、同団地町内連合会とが地域コミュニティの活性化に寄与する取組を目的とし、連携協定を締結している。



高い換気扇の掃除



粗大ゴミの搬出



全体集合



網戸の洗浄



浴室のカビ取り



掃除物品の受け渡し



棟長の案内で協力者宅へ移動

# 支え、支えられる、メンタルヘルスに着目したサポート 「しゅくだいかたづけ隊！」参上

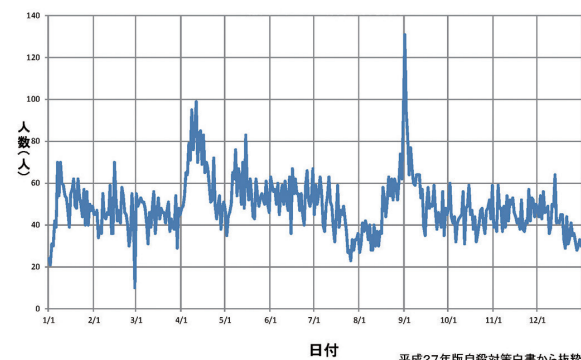
大久保 千恵 Okubo, Chie  
健康科学部 心理学科

子どもの人口は減少しているが、子どもを取り巻く問題は増加しているという矛盾をはらむ現状がある。たとえば不登校児童生徒数、いじめの認知件数、全国の児童相談所が対応した児童虐待の件数などは年々増加し、6～7人に一人の子どもがとてつもない経済的な環境におかれているとされている。また自死についても子どもを巡っては深刻な問題がある。というのも、本邦では、1998年から2011年まで、年間の自死者数が3万人を超えていたが、さまざまな対策の結果、2012年以降全世代の自死者数は減少してきた。しかし、19歳以下の自死者数は増加傾向にある。2018年において19歳以下の人口10万人当たりの自死者数を示す「自殺死亡率」は、統計を取り始めた1978年以降で最悪だったそうである。現代社会における子どもをとりまく問題は枚挙にいとまなく、多くの子どもたちがさまざまな困難の中で、懸命に今日を生きるべく苦戦しながら頑張っている。

かねてより、さまざまな困難の中で苦戦しながら頑張っている子どもたちを支援することにおいて、大学はハード・ソフト両面から有効な機能を持つ場所であると考えてきた。子どもにとって大学という日常から離れた場は、安心できる居場所となりうる。大学には子どもたちが思う存分活動できる様々な設備がある。また、大学生や教員と活動する中で成功体験を積み重ねることにより、傷ついた自尊心を修復し、自己肯定感を高め、子ども自身もつ回復力や成長する力が推進力となって、それぞれの夢に向かって進んでいくことにつながる。大学生という「ナナメの関係」の果たす役割は大きい。親や教師といった「タテ」の関係でもなく、同年齢集団といった「ヨコ」の関係でもない。子どもは大学生と接する中で「知らなかったおにいさんやおねえさんだけれど、お話ししていたら安心できて、楽しくて、わたしの存在を認めてくれてほめてくれた」という経験をし、困難に

立ち向かうエネルギーを得ていくと考え、小さな活動を行ってきた。

そのような中、2015年に内閣府が公表した1972年から2013年の42年間における18歳以下の子どもが自死をした日の調査結果(図1)に衝撃を受けた。子どもの自死のピークは夏休み明けにあった。この事実を知ったことが「しゅくだいかたづけ隊」の活動に取り組みきっかけとなった。夏休みに大学という場で、「ナナメの関係」である大学生と接する経験を通して、子どもたちがこころのエネルギーを補充し、困難を抱えながらもそれを乗り越えて成長していくことを支える小さな支援をしようとするに至った。すなわち、「しゅくだいかたづけ隊」は、学習支援だけでなく、子どもたちのメンタルヘルスにも注目した活動である。子どもの個性を尊重し、自己肯定感を高めるようなサポートを行うことによって、自死を予防することのほんの一端を担えたら、と考えた。



平成27年版自殺対策白書から抜粋  
(過去約40年間の厚生労働省「人口動態調査」の調査票から内閣府が独自集計)  
図1: 18歳以下の日別自殺者数



大学の教室での活動の様子

「しゅくだいかたづけ隊」の活動は、2018年8月に開始し、2018年は山科青少年活動センターさんで夏休みの終盤の4日間に、2019年は夏休みの始まりの時期の3日間と、終盤の時期の2日間に、山科青少年活動センターさんと大学内の2か所で活動を行った。2019年は、「自由研究特別企画」として、臨床検査学科の米田先生と心理学科の石山先生の応援を得て、理科の実験を体験する企画も設けた。参加した子どもは、2018年は延べ7名、2019年は延べ69名であった。看護学科、児童教育学科、現代ビジネス学科、臨床検査学科、心理学の学生が隊員として参加した。学習サポートでは、心理学や行動科学の知見をもとに、個々の子どもにあったサポートを行い、学習に取り組む意欲を高め、集中が持続するように配慮した。なによりも子どもたちが「わかった!」「できた!」「がんばった!」と感ずることができるよう、子どもを尊重し、励まし、良いところをたくさん見つけてほめるよう学生に依頼した。

子どもたちは大学の自由な雰囲気に触れ、保護者と一緒に生協食堂での昼食なども経験した。「大学っていいなあ」という楽しそうな子どもの声を聞きながら、この気持ちが未来につながるといいなあ、と思った。夏休み前半の活動で「しゅくだい全部終わった!!」と嬉しそうな表情だった子、活動最終日にまだたくさんの宿題を抱え6時間頑張った子、学生の励ましと工夫でパワーが全開になった子、など子どもの様子はさまざまだった。多様な子どもの個性を尊重し、温かく根気強く寄り添いながらポジティブなことばがけを行い、達成感を共有するという経験は、専攻する学問領域に関わらず、学生の教育に資するところがあったと考える。子どもたちから「教えてくれてありがとう」とお礼を言われ、笑顔でハ

イタッチをされる学生の表情もまたさわやかで、子どもの自己肯定感を高め、メンタルヘルスの向上に役だつことを目的としているこの活動が、実は学生の自己肯定感を育むことにもつながっていると感ずられた。

さまざまな困難に立ち向かい、苦戦しながらも成長している子どもたちに開かれた居場所として大学が機能していくことを学生と一緒に模索し、その活動を通して学生も成長していくことを今後もサポートしていきたいと考えている。

参考: <https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/jisatsu/19/index.html>  
<https://www.nikkei.com/article/>



活動の様子

## 京都モダニズム建築を訪ねて 最終回\*

\*文化政策研究センター広報誌「News Letter」からの連載回数を引き継いでいる

# 京都のモダニズム建築前夜

河野 良平 Kohno, Ryohei

本学現代ビジネス学部准教授

神社仏閣の街として知られる京都だが、戦災を免れた結果、多くの「近代建築」も生き残っている。ここで紹介する建築群は三条通りに沿って建てられていて、奇跡的なほど近代建築がモダニズム建築へと移り変わる様子を目の当たりにできる。ここで言う三条通りは、東の寺町通りから西の烏丸通り辺りまでを指している。以下の用途からも分かる通り、当時この周辺は金融街の様相を呈していた<sup>1</sup>。当然、金融機関は安全や信用が第一であり、建築もその外観・内観のデザインによってそれを表現する必要があったであろう。それらの建てられた敷地も、日当たりが良く建築の見映えする南東の角地が多く選ばれている。このことは明治の開国以降、近代建築が京都にも徐々に浸透し、広く一般にそのデザインが受容されたことを示している。

三条通りに現存する近代建築の中で最古のものは「中京郵便局」(1902、写真1)である。設計は吉井茂則<sup>2</sup>(1857-1930)と三橋四郎<sup>3</sup>(1867-1915)、外観はネオルネッサンス様式で、外壁は赤レンガと白い石の2色でまとめられている。南側中央に2本の柱で支えられた小さな屋根を持つエントランスが設けられ、ファサードの対称性を強調している。建物のコーナー部には交互に形状の異なる石材が積み上げられ、角部を装飾している。窓の上に設けられた小庇も石でできており、アーチや三角の破風を用いてデザインされている。屋根の端部にも銅製の装飾が取り付けられることで、三条通りに面した立面が賑やかになるよう演出されている。

「京都文化博物館別館」(1906、写真2)は、もともと日本銀行京都支店として建てられたもので、設計は辰野金吾(1854-1919)と長野宇平治(1867-1937)である<sup>4</sup>。外観はクイーン・アン様式を参考にした赤レンガの地に白い花崗岩のストライプを施した「辰野式」<sup>5</sup>と呼ばれる独自のデザインになっている。建物外壁の角部に装飾はないが、2階の窓上部や壁と屋根の接する部分には装飾が施されている。入口はこの建物でも南側立面の中央にあり、上部には装飾の施された破風が設けられている。銅板とスレートによって仕上げられた屋根は複雑にデザインされ、三条通りに対して積極的に訴えかける意匠となっている。

次は「日本生命保険京都三条ビル」(1914、写真3)で、こちらも設計は辰野片岡建築事務所である。現在、この建築は南東の角部と東側の一部のみが保存されているが、先の作品と異なるのは、外壁が全て白に近い明るいグレーの石材によって仕上げられている点である。しかし、開口部の上部や屋根には依然として装飾が施されている。屋根は銅板とスレートによる仕上げである。近くにある日本建築株式会社の設計した「SACRAビル(旧不動産金銀行三条支店)」(1916)も外壁の仕上げは同色の石材でまとめられている。

最近まで「新風館」と呼ばれていた建物は現在改装中で、もともとは「京都中央電話局」(1923)として建てられた。設計者は吉田鉄郎(1894-1956)である。この作品も建物の一部のみが保存され、そこから判断する限り外壁は全面茶色のタイル貼りである。この作品が以前の作品と大きく異なるのは屋根で、装飾のない陸屋根が採用されている。

最後に「1928ビル」(1928、写真4)である。設計者は武田五一(1872-1938)で、大阪毎日新聞京都支店としてデザインされた。外観はアール・デコ様式でまとめられ、現在は淡いピンク色で統一されている。北側最上階に開けられた星型の窓がファサードのアクセントになっている。西側から見ると、最上階に緑色の屋根が確認できるが、北側は陸屋根になっており、その頂部に

は連続する小さなアーチが装飾として施されている。

このように見てくると様々な変化が時代とともに現れていることに気づく。特に外観は新古典主義的なものからモダニズム的なデザインへと変化していく様子が見て取れる。2色用いられていた外壁は単色となり、装飾が徐々に単純化され減っていった。屋根も銅板とスレートによる賑やかなデザインから、スッキリとした陸屋根へと変化している。このような外観上の変化は、モダニズム建築をデザインする上でも引き続き重要な要素として検討され続けたであろう。20世紀初頭の四半世紀に起きた近代建築からモダニズム建築への変化の過程を見ることが出来る三条通りは、日本でも非常に稀で興味深い場所なのである。



写真1: 「中京郵便局」南西側外観。壁面は2色で構成され、各所に装飾が施されている。(筆者撮影)



写真2: 「京都文化博物館別館」南東側外観。「辰野式」による白いストライプが映えた壁面。(筆者撮影)



写真3: 「日本生命保険京都三条ビル」南東側外観。各所に装飾が残るものの、壁面は一色に統一されている。(筆者撮影)



写真4: 「1928ビル」北西側外観。古典主義的な装飾がなくなり、アール・デコ調でまとめられている。(筆者撮影)

<sup>1</sup> 中川理「技術を背景とする土木官吏の台頭」『京都と近代 せめぎ合う都市空間の歴史』、2015、pp.89-92

<sup>2</sup> 通信省管轄課の初代課長。明治25年通信技師。村松貞次郎「通信管轄の建築家たち」『日本建築家山脈』、2005(復刻版)、p.135

<sup>3</sup> 陸軍、通信技師、東京市技師管轄課長などを務めた後、建築設計事務所を開設。村松「蔵田周忠を育てた人びと」、前掲書、p.229

<sup>4</sup> この辺りの内容は京都文化博物館の公式HPを参照した。

<sup>5</sup> 河上眞理他「辰野金吾—美術は建築に応用されざるべからず—」、2015、pp.173-175

## 限界集落の空き家がオーベルジュに生まれ変わり、そこに人が集う

まちの持続可能性を、ビジネスによって高める取り組み

ゲスト

**金野 幸雄** Kinno, Yukio

一般社団法人ノオト 代表理事

聞き手

**村上 裕道** Murakami, Yasumichi

本学文学部教授

### かやぶき町家との出会い—柏原城下町

**村上** 金野さんと私は、かつて兵庫県職員として働き、金野さんは土木、私は教育委員会と、部署は別でした。しかし、1995年（平成7年）の阪神淡路大震災を契機に、部署の枠を越えて都市再生のあり方を議論するようになりました。空き家の再生を話し合うようになったのは、いつ頃でしたか。

**金野** 私が丹波県民局のまちづくり課長として柏原（兵庫県丹波市柏原町）に赴任したのが2001（平成13）年ですから、それからしばらく後だと思います。たまたま県民局のオフィスが柏原城下町にあり、歴史地区の古い建物が壊されていくのを目の当たりにして、城下町に唯一残るかやぶき町家を現地保存できないかと、諸機関との交渉等に動きまわりました。このままでは柏原のまちの貴重な資源を失うことになると考え、建築や文化財の専門家である村上さんに相談に乗ってもらいましたね。

**村上** その頃、私は地域の歴史的建造物の再発見と活用に取り組むヘリテージマネジャーを育成すべく、ボランティアな組織を立ち上げたところでした。マネジャー育成プログラムの修了者を登録して、まちづくりに悩む人のお手伝いをしようと話し合っていたとき、ちょうど金野さんの相談を受けて、みんなで押しかけました。

**金野** 結局、かやぶき町家は、現地保存がかなわず、解体保存になりましたが、2005（平成17）年頃にヘリテージマネジャーの方々と協力して「NPO法人町家屋なみ研究所」（略称：町家屋研）を立ち上げ、篠山で古民家再生に取り組み始めます。最初に手がけた古民家は、プロの職人さんとボランティアが共同して工事した結果、比較的安く改修でき、無事に販売できました。ボランテ



金野幸雄氏



集落丸山

ィアの力を借りることで低価格で世に出せることを証明して、事業として成り立つと自信を持ちました。この経験が古民家をオーベルジュとして活用する「集落丸山」の事業へとつながりました。

### なぜ「限界集落」でホテル経営が成り立つのか

**村上** 「集落丸山」は、丹波篠山の北を5キロほど行った山あいにある、丸山という集落の古民家を改装したホテルです。尾根と尾根の間の谷筋の集落は、かつては「限界集落」そのもので、12軒のうち7軒が空き家となり、残ったのは5世帯のみという状態でした。とてもビジネスが成り立つ場所とは思えませんが、なぜそこをホテルにしようと思ったのですか。

**金野** ひとつは私自身がその村（集落）に心地よさを感じたからです。携帯電話は圏外で、自然のほかは何もなく、行ってもボーっとしているだけだけど、ほっこりできるし、村の先は山だから地の果てに来たような感もあって、おもしろい。

それと、村の人たちに「この村を継ぎたい」という強い意思を感じて、なんとかしなければとも思いました。私たちが景観調査に入ったとき、当時の自治会長で、いまは「集落丸山」を運営するNPO法人の理事長を務めておられる方が、必ず谷で農作業をしておられる。耕作放棄地ばかりなのに、それでも懸命に耕しておられる姿に「村を守りたい」という強い想いを感じて、どうすればこの集落を残せるかを考え始めました。

だから、丸山でビジネスをしようと思ったわけではあ

りません。しかし、ビジネスとして成立しなければ持続可能性はないので、ビジネスになるようなスキームで設計しました。

**村上** 一般論でいえば、谷筋の限界集落で、半分以上が空き家で、里山といっても荒れ放題で、耕作放棄地だらけの集落。ホテル経営が成立するとは考えにくい。成功要因は何だと思いますか。

**金野** ひとつはランニングコストの低さでしょう。当初はプロのマネジャーを置けばうまくいくだろうと考えていたのですが、集落の方々が「自分たちで運営したい」とおっしゃって、地域の人たちがNPOをつくり、チームでオペレーションすることにしました。たとえば清掃、ベッドメイキング、床の間に花を活ける等々、各人の得意な作業をオペレートして、それが時給1,000円のアルバイトになるわけです。

これが意外におもしろくて、仮に2割しか稼働しないとしたら、村の人たちが働く時間も少して済むから、人件費が減る。つまり、固定費が安いから稼働率2割でも経営が成り立つし、時給1,000円という小さなお金が集落を循環して、経済的側面でも村の持続可能性を高めている。この地域運営方式を使えば、たった2室（棟）のホテルから始めることができます。

それと、たまたま新しい補助金制度に採択されて、改



村上裕道教授

修資金の2分の1を確保できたことも大きかったですね。プランニングをして資金の算段をしていた時、思いがけず公募がありまして、たった2週間の公募期間でしたが間に合いました。夢を現実にするには常に取り組むことが大切だと思います。

## 耕作放棄地が消えた集落

村上 さらに、丸山の集落では、耕作放棄地が消えて、荒れていた里山の周辺もきれいになりつつあります。

金野 「集落丸山」のオープンによって、谷のいちばん奥の、わざわざ行く必要もない村を、外から来た人びとが行き交うようになり、そこに泊まり、食べ、イベントに参加するようになりました。

実際に行ってみると、最初に私が感じたように、「ここ、いいね!」と思わせる雰囲気があるので、「ここで黒豆を育てたい」と言う都会の人も現れたんです。それで自治会長が農地を貸すことにしたら、市民農園のようなものが自然増殖していきました。

黒豆から始まって、酒米、オーガニックコットンなど、いろいろな作物をいろいろな人が栽培しています。

田んぼは不整形だし、日当たりも悪いので、一般的には耕作不利益ですが、谷のいちばん奥は山の清水が直接当たる場所。オーガニックにこだわる人にとっては聖地のようなもので、そういう人たちが農地を使うようになったから、とうとう農地が足りなくなり、いまは開墾する人がいる。



篠山城下町ホテル NIPPONIA onae 棟外観

里山は、NPO 法人「日本森林ボランティア協会」のチームが2011年から来てくださっています。丸山のように、まちづくりに取り組んでいる地域は受け入れ態勢があるから、森林整備のボランティアの人たちも動きやすいようです。

この人たちの態度もじつに立派で、お茶の接待などは

一切拒んで、さっと山に入り、間伐などの作業をして、たまにはテントの下でイベントを楽しんで、山をきれいにして帰っていく。まさに自発的で、スマートで、自己完結した活動スタイルです。

## デベロッパーに徹する「ノオト」

村上 一般社団法人ノオトは、丹波篠山市の「集落丸山」や「篠山城下町ホテル NIPPONIA」(以下「NIPPONIA」)、あるいは朝来市の旧木村酒造場を再生した「竹田城 城下町ホテル EN」など、その土地ならではの資源を生かした事業で注目されています。そもそもノオトはどのような経緯で設立されたのですか。

金野 私は2007年から4年間、兵庫県庁から篠山市(現丹波篠山市)に副市長として出向したのですが、当時、市の財政は全国ワースト5というぐらい悪く、財政破綻は目前でした。人員削減や給与カットなど大胆な行財政改革を断行しました。その一環で第三セクターの整理統合・民営化を進めた結果、公益事業に特化して事業を行う一般社団法人ノオトが生まれたのです。

第三セクターにいた職員は、もともと嘱託職員等でしたから、それをさらに民営化すれば労働強化か賃金カットは避けられない。そこでノオトについては、新しいソーシャル・ビジネスで事業収益をあげて職員の処遇改善を図ろうと考え、私はボランティアで代表理事を引き受けました。

その意味では不幸な出自といえますが、このときに取り組んだ新しいソーシャル・ビジネスのひとつが古民家再生事業で、現在の事業モデルを確立する出発点となりました。

村上 そうすると、ノオトは古民家再生事業において、どのセクションを担当しているのでしょうか。

金野 この事業は、物件所有者とデベロッパーと再生した古民家で事業をオペレーションする人という3層から成り立っていて、ノオトは基本的にデベロッパーを担当します。

村上 物件の買取から事業の運営まですべてをコントロールするという発想ではないのですか。

金野 そうです。私たちが料理を考えるより、料理の上手なシェフに来てもらう。オペレーションに長けた人がいたら、その人と物件所有者をつなぐ。なぜなら、私た



金野 幸雄  
1955年徳島県生まれ。  
東京大学工学部土木工学科卒業後、  
兵庫県職員、篠山市副市長、  
流通科学大学特任教授を務める。  
2009年に一般社団法人ノオトを設立して、  
古民家等を活用した地域再生事業に取り組む。

ちが囲い込みで施設をつくっても意味がないからです。

ですから、時には「開発も運営もやってほしい」との依頼がありますが、お断りします。「あなたがまちづくりに情熱をお持ちで、ご自身が取り組まれるならお手伝いしますが、私たちがあなたのまちにこのこと出かけて、商売をしても意味がないでしょ?」と。

## オリジナリティ豊かなまちを全国に

村上 ノオトの活動は、政府の「明日の日本を支える観光ビジョン」という政策のなかで、「古民家の再生等により、魅力的な城下町の街並みを実現するとともに、限界集落や農村地域の再生に大きく貢献した」と評価されています。

金野 この観光政策は、「集落丸山」や「NIPPONIA」のような歴史的資源を活用したまちづくりをオリンピックの2020年までに全国200地区で取り組み始めるという政府目標を掲げていて、私たちもいま、ノオトの理念やノウハウを伝えるために全国を駆けずり回っています。

村上 政府がノオトの活動を評価する理由は何だと思えますか。

金野 ひとつは観光政策として、特に欧米の富裕層が長期滞在することによる経済効果をねらっているのでしょう。もうひとつは地方創生の側面からの評価だと思います。

というのは、ノオトが仕掛けるのはマストツーリズムではないので多数の観光客を呼び込むわけではありませんが、地域に経済インパクトを与え、かつその地域に雇用や産業が生まれて、地域が元気になる仕掛けもセットでやっています。そこがとても良いモデルとして評価されたのだろうと、私は考えています。

村上 ノオトが最終的にめざすのは、どのような社会ですか。

金野 「集落丸山」にしても、「NIPPONIA」にしても、良質な空間と食とクラフトの組み合わせ、すなわち地域にクリエイティブコアを創ることを大切にしてきました。事業のスキームは同じでも、一つひとつ違う個性の地域ができるわけで、それがローカルなまちづくりのおもしろさです。

言い換えれば、「どこへ行っても同じ味のハンバーガーが食べられる」のではない世界を構築することの意味ですね。レシピは同じだけど全部違うものができるのがローカルのおもしろさであり、そこに本当の豊かさがあるって、その象徴が丸山という集落だと思います。もし、あの集落を消滅させていたら、クリエイティブコアが失われ、私たちは文化的多様性を失っていたでしょう。



onae 棟客室

そういうローカルなクリエイティブコアを全国に創って、それをネットワークするのがノオトの目標です。しかも、これは一種の社会運動のようなものですから、ノオトだけでやるのではなくて、細胞分裂するように広がってほしいなと思っています。

村上 金野さん自身の夢は?

金野 あるべき国土計画を提示したいですね。人口減少が進み、社会は縮小局面に入っていますが、より望ましい縮小の仕方があると思うし、そのモデルを提示したい。丸山の集落は、人体に例えたら指の先端のようなところだから、そこが守られたら手のひらも温められ、身体全体に体温が戻ってくるのではないかな。そんな健やかで豊かな国土づくりに関わられたらと思っています。

(了)



## 地域の歴史的資産をつなぐ

人口減少・少子高齢化、そして、成熟社会への転換が喧伝されて久しい。しかし、縮小していく地域において、皆が明るく自慢しながら取り組む姿を創ることは難しい。本稿において、足立先生から西脇小学校の再生事例、金野さんから地域再生の取り組み状況について報告していただいた。それぞれ「誇りを紡ぐ」事例である。

西脇小学校の存続問題が議論された頃、横尾忠則氏が、「私の自慢」として西脇小学校を語り、その存続を地元の市民団体に託した内容が神戸新聞（2014年1月24日夕刊）に掲載された。そこには、専門的な文化財的価値についての言及はなく、地域にとって大切なものを住民自らの心に問おうとする想いが見られた。「縮小していく地域において失望が一番避けるべきこと」と、足立先生初め有意な者たちが動いたことを覚えている。そして、先生が辛抱強く色々な想いを収斂させて、木造校舎の再生をはたされた。

先日、市の教育長とお話する機会を得た。その時に、校舎は木造で古くて温かみがあるが、防音マットに耐震構造、さらに、WIFIが飛び、電子白板、プロジェクター、そして、調理室はIHヒーター等と、中身は最先端ですねと声をかけたところ、将来、子供の数が減るが、「自慢できる校舎」に集まるのなら住民は納得してくれるかもしれないと、遠くない未来の状況を明るく話された。

篠山の再生事業では、これまでに空き家の民家再生を約60か所で実施してきた。地元民になったシェフが地元の食材を提供するレストランから専門のプロが営業するホテルまでバリエーションに飛んだ事例を示すまでになっている。インタビューでは示していないが、この古民家再生で122人の雇用を生んでいる。縮小している地域で企業誘致をしても、最近ではアルバイトが多い。それに比較して、古民家再生では、規模は小さいが、経営に参画している人たちは皆面白い。古民家再生では、その地域の歴史と文化をクリエイティブに表現しなければならないことから、高学歴な人たちが興味を持ちたがる仕事場となっており、地域に戻りたい人たちの仕事場になる可能性を秘めている。

地域の歴史文化を活かしたまちづくり事例として、個別単体、そして、面的な事例を紹介させていただいた。2例とも人口減少地域のヒントになると思うが、どちらも時間がかかっていることに留意したい。今後は、地域の文化的価値の収斂、資産管理を考える文化財保護の手法（文化財保存活用地域計画）を活用して、地域の納得する時間をデザインするべきと考える。

（歴史遺産学科 村上 裕道）

